様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２３９８

研究課題名（和文）戦後児童文学にみる「文学」の体系化と規範化――少年少女向け叢書を中心に

研究課題名（英文）Formation and canonization of "literature" in postwar Japanese children's literature

研究代表者
佐藤　宗子（SATO, Motoko）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：４０１５４１０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、第二次大戦以降の主要な少年少女向け文学全集を対象に、近代文学がどのように体系化されたか、編集企画等にみられる「文学」に対する発信者側の意識を明らかにした。主要な叢書群には、当時の近代文学研究の動向が反映され、作家主体の編成から作品中心への変遷がうかがえる。他にも、随筆や紀行文など文種の多様性の存在がやがて小説中心に変化する点、下村湖人や山本有三らの教養小説的作品群が次第に凋落する点、夏目漱石の特権的位置の確立、国語教科書との関連性などが確認できた。これらの知見は、少年少女読者を対象に「文学」がどのように整備・確立され、享受されたかというより広い視野の研究に発展させ得るものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
第二次大戦後に「現代児童文学」が出発し、高度経済成長の中で創作・翻訳の作品が多数刊行されていったが、その一方で一般文学の作品を収録した少年少女向き叢書も数多く刊行されていた。本研究ではそのうち近代文学を対象として刊行された主要な叢書類を１９５０年代から７０年代にかけて順次検討していった。それにより、人格陶冶など「教養形成」を念頭において読書行為が期待されていた時代において、少年少女読者にもそれが求められていた状況が具体的にみえてきた。また時代の流れに即して選択される作品に変化がある様子など、戦後の社会・文化状況の中での「文学」の意味・意義について明らかにしていくことをした。

研究成果の概要（英文）：This study clarified how modern literature was codified, and the editorial planners' consciousness of "literature", targeting all major literature collections for boys and girls since World War II.The main series of books reflect the trend of modern literature research at that time, and show the transition from author-oriented organization to work-oriented editing.Other than that, some points were confirmed;the existence of literary diversity such as essays and travelogues eventually changed to novels;cultural novels by SHIMOMURA Kojin and YAMAMOTO Yuzo were gradually disappearing;NATSUME Soseki established privileged position as a great writer;relationship with Japanese language textbooks, and so on.These findings can be developed into a broader study of how "literature" was developed, established, and enjoyed by readers of boys and girls.

研究分野：児童文学

キーワード：児童文学　近代文学　日本文学　叢書　少年少女

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究代表者は、多年にわたる児童文学研究の中で、柱の一つとして、比較文学的な立場に立った、日本における翻訳・再話の追究を行ってきた。

その中で、１９９８年には論文「選ばれた「名作」――「岩波少年文庫」と「世界名作全集」の共通書目――」で、１９５０年に刊行開始され、芸術的と大衆的の、対照的な叢書として捉えられがちであった二つの叢書の意外な共通点について指摘をした。そして、それ以降に受けてきた科学研究費補助金による研究では、一貫して戦後の少年少女向け翻訳叢書を主対象としてきた。とくに、「少年少女向け名作と「教養形成」――児童文学における翻訳叢書が果たした役割」、その後の「戦後の少年少女向け翻訳叢書にみる「西洋」と「東洋」――教養形成の追究」と、「叢書」中心の考察を継続してきた。そこからは、「叢書」という形態が一方で発信者側の対読者意識を強く浮かびあがらせつつ、他方で学校教師など子ども読者への「媒介者」が抱いている理想的な「読書」の内容が、その時代における「教養形成」と密接にかかわっていることが明かされてきた。そして、時代が下るにつれ、叢書の構成や対象年齢層が次第に変化する傾向があるとともに、収録される作品が固定化する傾向があることも見えてきた。その中で、「教養」形成を図るという明確な意識まではなくとも、「体系化」「規範化」の意識は明確だと考えられる事例があると考えるに至った。

さらに、少年少女向け叢書には、広く「日本文学」を対象としたものが多く、これを、従来焦点を当ててきた翻訳叢書における「世界」と包括しつつ検討していく必要を感じ始めた。翻訳叢書中でも、「世界」の一区分として「日本編」が編まれ、そこでは「世界」各地域の編纂と同様に、古典・近代文学・児童文学の三区分されている状況は確認済みであった。要するに、従来の「世界」対象の文学叢書に加え、「日本」対象の文学叢書を「体系化」「規範化」の観点から追究することにより、戦後の日本社会が十代の「少年少女」読者に、「叢書」形式の読書を通じて何を提示し、何を獲得させようとしていたかが、より一層明らかになると考えた。

２．研究の目的

日本における児童文学の特質を明らかにするという全体構想の一端を担うものとして、とくに第二次大戦以降の時期における、主要な少年少女向け文学全集や叢書を対象として、近代以降の文学作品が収録されたものを順次取り上げ、作品群の選定や収録状況、編集のされ方を検証することを通して、児童文学において「名作」が確立していく過程を、「体系化」と「規範化」という観点から追究する。それにより、児童文学分野において、「文学」がどのように整備され、確立したイメージを作りつつ子ども読者に手渡されていったのか、広く戦後の社会・文化状況の中でどのように位置づけられるかを明らかにしていく。

３．研究の方法

研究期間を４年間とし、各年に主要な児童書出版社の叢書を中心として検証することとした。対象とした範囲としては、「現代児童文学」出発前夜の１９５０年代から、転換期を迎えて以降の８０年代までとした。まずは、初期の河出書房の複数の叢書、次に偕成社から刊行された、対照的な編集方針の二つの叢書と、それと対比させ得るあかね書房の叢書、その後、偕成社の一叢書に類似したポプラ社の叢書、最後に、８０年代に刊行され、２１世紀に入ってからも改版のシリーズが刊行中である講談社の叢書と、総体として「現代児童文学」出発以降の時期を覆うことができるように意図した。ただし、中核となるのは、５０年代から６０年代にかけての時期となった。

研究遂行に当たっては、まず、資料調査と資料収集を継続的に行うことに注力した。

資料調査については、大阪府立中央図書館国際児童文学館や、国立国会図書館国際子ども図書館など、専門資料所蔵館において該当する叢書類を調査したが、必要に応じて、周辺の文学全集や資料なども閲覧し、随時、資料収集に努めた。

なお、いずれの叢書も、調査を開始後に、しばしば増巻され、叢書の規模が大きくなっていくことが判明した。専門館であっても、そうした改版等のすべてを所蔵しているわけではなかったが、広告ページ等の活用を含め、変容・増殖の過程の概要把握を念頭に置くことにした。

期間中、国内外における学会の場で、段階的に成果発表を行うことで、有用なコメントを得ることを心がけることにした。なお国際的な学会は、この間、国際比較文学会、国際児童文学学会、アジア児童文学大会と、参加者の層が異なるものである。

さらに、４年間の成果をまとめた冊子作成をし、関係機関・研究者等に配布することで、「叢書」研究の今後につなげることを念頭に置いた。

４．研究成果

初年度にあたる平成２８年度（２０１６年度）は、１９５０年代に河出書房から刊行された「日本児童文学全集」「日本少年少女名作全集」「日本少年少女文学全集」を中心に、「ロビン・ブックス」にも目を向けて資料調査を行った。この結果、当時の「児童文学」と「小説」という読者対象年齢、散文の種類の多様性、「読書」をめぐる社会的な状況が浮き彫りにされてきた。

また、児童文学の普及にとっては重要な媒体である国語教科書への掲載のされ方にも目を向け、特に原作が海外の絵本である場合と、近代の短編収録に際しての挿絵を含めた掲載の状況について、比較考察を行った。この点については、２０１６年夏の ICLA（国際比較文学会）ウィー

ン大会での口頭発表の際に、改めて、体系化と規範化を追究することの意味の大きさを裏付けられたと考えている。

２年目の２０１７年度は、あかね書房から刊行された「少年少女日本文学選集」と偕成社刊行の「少年少女現代日本文学全集」の、類似した２種の叢書の比較をまず行った。国語教科書掲載を念頭に置くなど、いくつかの編集上の共通点がみられるが、いずれの叢書も、吉田精一が中心にいるなど、近代文学研究者が強く関与しており、「一人一冊」スタイルの「作家」叢書の体裁を強めていく方向がうかがえる。その一方、続いて調査をした偕成社の叢書は、対照的な点も多く見られた。上記叢書と近い時期に刊行開始されたのだが、「ジュニア版　日本文学名作選」においては、途中の度重なる増巻を経つつ、長編中心の収録がされていること、とはいえ夏目漱石や下村湖人などの作品重視の点では先行するあかね書房版や偕成社版と共通点も見られること、作品中心に題目設定がなされたことにより、個人の興味に即した読書が喚起される点や家庭における読書を前提とした享受の実相がうかがえることなどがわかった。

３年目の２０１８年度は、前年度に引き続き偕成社から刊行された「ジュニア版　日本文学名作選」の内容把握を確実にするとともに、同叢書に少し遅れて刊行開始となった、ポプラ社「アイドル・ブックス」に重点を置き、前者との対比も含めて検討を重ねた。１９５０年代刊行の少年少女向け日本近代文学叢書においては、「近代文学」というカノン形成が図られつつ国語教育の補完的意義も比較的強く有していたが、６０年代の偕成社「ジュニア版　日本文学名作選」において、また対抗するポプラ社「アイドル・ブックス」においては、作品主体の叢書となり、書目の編成にも特定作家や特定作品の定着がみられるようになってきた。両叢書においては、作家としては夏目漱石、作品としては『次郎物語』をはじめとする成長小説が重視されるなど、共通する面もある一方、競合する叢書として、前者は大衆的読み物、後者は一部翻訳作品を入れるなど、差別化も図られてはいる。また、それらの叢書は、資料館所蔵の図書に残された読書の痕跡等から、家庭における読書を念頭に置いたものであり、近しい年長者から年少の読者に向けて、「教養形成」を図る趣旨で手渡されていたことが容易に想像される。こうした叢書が時に装幀を変えつつ１９８０年代まで２０年近く読み継がれていた事実の重要性も確認された。

最終年度に当たる２０１９年度においては、「現代児童文学」のみならず広く日本の文学・文化の転換期と目され得る１９８０年代に刊行された講談社「少年少女日本文学館」を主対象とし、その表層と内実とが示す作品総体の差異に注目するところから、結果的に否応のない「規範」の複層化が生じている点を指摘し、その背景等にも考察を加えた。また本年度は、異なる国際学会で２回、国内学会で１回と、わりに多くの口頭発表の機会を得た。その際には、前年度までの成果を踏まえて、第二次大戦後の少年少女読者と読者環境に目を向けるなどし、講談社の叢書に関する特徴の提示も行った。後者については、高校の国語教科書との関連の指摘など、有益な反応を得ることができた。

４年間の研究全体を通じて、第二次大戦以降の１９５０年代から８０年代までを見渡し、主要な叢書群の編集方針や収録作品を概観することを通して、日本近代の「文学」が整備・確立されていく過程を追究するという当初の目的を達成することができた。「体系化」「規範化」に当たっては、それぞれの編集時期における一般の文学ジャンル、作家の位置づけ、作品読解の在り様が強く反映されていたことが明確となった。すなわち、近代文学研究の状況・動向が如実に反映される中で、少年少女向けの「文学」体系化・規範化が形成されていった。また当初は教育との関連が濃厚にみられたものの、６０年代頃からの読書環境の変化に応じて、文学を享受する場が変化する点も指摘できた。

今回の成果は、以前の翻訳文学叢書研究の成果などとも合わせて、より広い視野で叢書という形態を通した文学の体系化・規範化を考察する出発としての意義と重要性を持つものとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 佐藤宗子	４．巻 68
２．論文標題 複層化した近代文学の「規範」――講談社「少年少女日本文学館」の企て――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 412-418
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤宗子	４．巻 67
２．論文標題 家庭における読書と「教養形成」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 410-402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤宗子	４．巻 ６６巻１号
２．論文標題 近代文学作家の体系化と国語教科書の役割――あかね書房・偕成社の叢書を中心に――	５．発行年 2017年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 ４４８－４５６
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤宗子	４．巻 ６６巻２号
２．論文標題 一九六〇年代における「日本文学」の編成――偕成社の少年少女向け二叢書を中心に――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 ４３６－４４４
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤宗子	４．巻 65
２．論文標題 ＜文学＞と＜名作＞のあいだ――一九五〇年代河出書房刊行の少年少女向近代文学叢書を中心に――	５．発行年 2017年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 496-504
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 SATO,Motoko
２．発表標題 Canon of Essential Modern Literature for Teenagers: Formation and a Turning Point in Japan
３．学会等名 The XXII ICLA Congress 2019, Macau（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 SATO,Motoko
２．発表標題 Home Reading and Cultural Formation as Positive Silencing Strategy
３．学会等名 IRSCL Congress 2019, Stockholm（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤宗子
２．発表標題 複層化した近代文学の「規範」――講談社「少年少女日本文学館」の企て――
３．学会等名 日本児童文学学会第58回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤宗子
２．発表標題 読書の場と価値を問い直す――１９６０年代の家庭における「教養形成」から見えるもの――
３．学会等名 第１４回アジア児童文学大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤宗子
２．発表標題 家庭における読書と「教養形成」――一九六〇年代偕成社・ポプラ社の少年少女向近代文学叢書を中心に――
３．学会等名 日本児童文学学会第５７回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 SATO,Motoko
２．発表標題 The Role of Literary Series for Young People in Postwar Japan: The Intersections of Modern Literature and Children’s Literature
３．学会等名 IRSCL 2017 Toronto（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐藤宗子
２．発表標題 作品を読む、作家に学ぶ――戦後の少年少女向近代文学叢書の確立――
３．学会等名 日本児童文学学会第５６回研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 SATO,Motoko
２．発表標題 Language for Children, Literature for Children: What are the characteristics of the styles and forms of children's literature?
３．学会等名 21st World Congress of ICLA（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 佐藤宗子
２．発表標題 ＜文学＞と＜名作＞のあいだ――一九五〇年代河出書房刊行の少年少女向近代文学叢書を中心に――
３．学会等名 日本児童文学学会第５５回研究大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 中丸禎子ほか編	４．発行年 2020年
２．出版社 三弥井書店	５．総ページ数 350
３．書名 高畑勲をよむ――文学とアニメーションの過去・現在・未来	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考